

『白樺』群像 (二)

有島 武郎

武 田 寅 雄

作家となるまで

『白樺』の作家達がグループとしての文学的な雰囲気の中で互いに影響しあいながら成長して行った中で、有島武郎はまったく別個の出版をした点をまず挙げなければならない。即ち明治四十年、前年学習院高等科を卒業して、東大英文学科に入学した志賀直哉、社会科学科に入った武者小路実篤、国文学科に入った木下利玄、志賀と同じく英文学科に入った正親町公和らは「十四日会」を持ち、四月以降毎月会合して各自作品を持ちより批評し合い、それが纏て「白樺」発刊へと発展することになるのであるが、武郎は彼等とは年齢も違い、直接にはこの企てに参画せず、影響を受けることもなかった。四十一年武者小路らは画覧誌『望野』（始め々ばや次で々暴矢々）を出したが、翌四十二年に同じ学習院系の園池公致らの『麦』、柳宗悦らの『桃園』と合流して『白樺』発刊に漕ぎつけ四十三年一月に創刊号を出す運びになった。彼等の文学活動は従って四十年頃より次第に活発となり『白樺』によって発表機関を得て、その成果が結果を見るのであるが、武郎は当時米國より帰り母校の東北帝国大学農科大学（旧札幌農学校）に教鞭を執って居り『白樺』の運動に賛同して執筆することになるが、彼の文学活動は既に米國留学中、一九〇六年（明治三十九年二九才）に「かんかん虫」を書いた時から始まっている。この作は後に『白樺』第一巻第七号（明治四三

・一〇）に発表されるが、この第一作に既に武郎の人生観、その後に展開する作家活動の方向をよく示しているといふことができる。

クかんかん虫とはドックで船体の錆落しをする日傭人夫のことで、横浜地方のみに用いられた俗語である。この作の舞台はウクライナの黒船沿岸の港町で、港湾労働者の生活を描いたものである。直ぐ想起されるのはマクシム・ゴーリキーの「チェルカッシュ」(Tchekash 1895)である。初期のロマンティックな筆致ではあるが、浮浪人チェルカッシュをとおしてルムペン・プロレタリアートの卑俗性をよく描き出しているが、この「かんかん虫」もまた浮浪人に近い日傭人夫の生活を労働者の立場から描いている点、まったくユニックであり、後に現れるプロレタリア文学の先駆をなすものと見ることが出来る。もともと明治四十三年の時点では、そのような評価はもちろん生まれなかった。この作の着想は何処から来たものか不明であるが、チェルカッシュとの類似性はあるヒントを与えるものではないかと思われる。^{注(1)} 明治中期に行なわれた観念小説や深刻小説と違って「労働者の立場から」描いている点がこの作を特徴づけている。即ち武郎の作家生活の第一歩は、それまでの日本文学の、自然主義作家も描かなかった新しい題材を新しい観点から取り上げたという点で全くユニックであるということが出来る。彼が高級官僚出身で、後に実業界に入って産をなした有島武の長男であり、いわば富裕なブルジュアの家に何不自由なく育ち、学習院では皇太子のご学友に選ばれた彼としては全く想像できない出発といわねばならない。

それでは彼の人間形成は如何にしてなされたか。既に諸家の研究によってその生い立ちから、作家となるまでの途は一応明らかにされている。第一に挙げられるのはその家系から来る資質である。薩摩の下級武士から身を起して明治維新の風雲に乗じて横浜税関長、国債局長に累進、官を辞してからは実業界に入り日本郵船、日本鉄道の重役を歴任し、その間、財を蓄えて新興ブルジュアの一人となった父武と、南部藩江戸留守居役の娘であった母幸との家系をたどれば武家としての矜持と、明治新興資本家階級としての実生活上の安定が、武郎の家庭環境の雰囲気であった。

武郎がこの第一作を書いたのはいわばこの名門からの脱出を試みたもので、幾多の思想遍歴の到着点を示し、同時に新しい出発を意味するものである。

彼は父が横浜税関長を努めていたために、六才の時からアメリカ人について英語会話を学ぶ機会をもち、後横浜英和学校に学んで十才まで続いた。その後は学習院予備科に入学し、十九才中等科卒業まで学習院教育を受けた。（この間父が官を辞して鎌倉に隠棲した明治二十六年（一六才）より、土、日曜日には外祖母山内静の家に帰ることになり、その精神的感化を受けたといわれている。）明治二十九年（一九才）学習院中等科を卒業すると、札幌農学校予科に入学、明治三十四年（二四才）卒業まで北海道で暮した。（この間キリスト教に近づき三十三年（二三才）には札幌独立教会において洗礼を受けた。）これが第二段階である。^{注）2}

卒業とともに一年志願兵として第一師団歩兵第三聯隊（麻布）に入隊、軍隊生活についてはキリスト教徒の立場から、その形式主義、無内容な精神主義に激しい反発を感じたことが日記に記されている。即ち「在營回想録」の冒頭に

「十一月十三日 去年（明三四）十二月一日兵營に入りて殺生の器を取りてより茲に一年を経、われは再び机に対つて書に親しむ阿蒙となりぬ。」

という書き出しで、この一年間の回想を記しているが、随所に反国家的な文字がちらねられている。まず国家の存立意義に深い疑問を投げかけ、キリスト者の立場から軍隊生活の不合理、国家の名において行なわれる殺人を罪惡として呪咀している。

その翌年明治三十六年には新渡部稲造が皇太子の輔育者に推挙しようとしたが断わり、次で内務大臣児玉源太郎の秘書官に推薦せられたがこれも断っている。この事実は「在營回想録」に記された思想と呼応するもので、反体制的抵抗の精神は、日常生活の紳士的な举措の内に既にあったと思われる。この年八月米國留学の途にのぼった。この留学

中にキリスト教からの離脱、文学への志向という大きな転換を成し遂げるのである。

札幌農学校での卒論は「鎌倉幕府初代の農政」で、この主題の示すように彼の興味は実際の農学より経済と歴史に傾いていて明治三十六年（一九〇三）九月にペンシルヴァニアのハアヴァフォード・カレッジの大学院に入学した時は経済と歴史を専攻している。約一ヶ年研鑽の後翌年七月「日本歴史に影響したる外国文明」を以てM・Aを受けた。

その後フランクフォードのフレンド精神病院 Friends Asylum for Insane に看護人として入った。その動機は明らかではないが、当時の武郎は札幌時代からキリスト者として厳しく己れを律する生活をして居り、この精神病院に入ってから家宛の書簡には――

「――七月二十三日於フランクフォード精神病院

私の今手紙を書いて居ります所は、費府を去る約十九哩なるフランクフォード精神病院の三階であり升。然し、勿論、私が精神病をわづらつたものではありません故是れは御安心下さい。」

という書き出しで費府のような都会地では市街の雑鬧で夜も眠れず、何処か閑静な処で読書しながら経験にもなるような生活をしたというので此処を選んだことが記されている。この精神病院での体験が有島の信仰なり人生観にどのように影響したかについては宮野光男の詳細な研究があるので、それを跡づけながら、宗教から文学への途を辿ってみることにする。^{注(3)}

宮野は「有島の肯定的自己認識は、まず情緒的な神認識の中にみることが出来る。」とする。

「何が故に余は此の如き所に來れる？余自らさへ其深き意義を知らず。人をして好奇の心餘りあるものなりと云はしめよ。されど余自らは疑ふ事能はず。神は余を茲に導き給へり。」〔全集第九卷四三二頁〕

で知られるように神の摂理によって自らいつの間にか精神病院に身を置き、奉仕の生活を送るようになったのである。従つてそこの生活は「余は聖書の中、ヨハネ伝を規則正しく読み居れり。」〔全集第九卷四三四頁〕というよ

うな生活であつた。感激をもって心の病める人々を看護し、食事や入浴の世話することに生き甲斐を感じていたものである。

生活の安きに即くことを戒める精神はキリスト教的倫理観というよりも、彼の家庭環境から出た儒教的倫理観から出発したものと思われるが、少くともクエーカーの精神的一面が滲透していることは拒めない。有島の信仰はほかの近代文学者に多く例を見るごとく、情緒的で陶醉的傾向を持っていた。「神は直ちに祈りを教へ給ひぬ。」という告白は、神との直接的な触れあいを意味している。キリストが漁夫や税吏の足を洗ったように自らも精神病患者に仕えるのである。それは善であり、義であつた。そしてこの信仰を直接行為に現わすことが不可欠のことであつた。

「Carlyle のいつたように “The end of man is an action, and not a thought” だ。」と云つてゐるのもその心底にひそんでいたものが何であつたかをうかがうことが出来る。

少し話が飛躍するがこの action について本多秋五が「『白樺』派の文学」^{注(4)}の中で面白い見解を述べている。本多は有島の「卑怯者」(大正九新潮社版『現代小説選集』中に収む)と志賀直哉の「小僧の神様」を比較して

「『卑怯者』を例へば志賀直哉の『小僧の神様』と比較してみれば二人の主人公の——ひいて二人の作者の実践的性⁽⁵⁾格と非実践的性⁽⁵⁾格(ないし無性⁽⁵⁾格)は明らかである。」

と述べている。そして「卑怯者」が有島の作品系列の中でも出来のよくないものとして

「『小僧の神様』は志賀の第一級の作品といふのではないが、しかもこれは格別の出来栄えの作品であつて『卑怯者』はたうてい『小僧の神様』と同日に語られることが出来ない。——のみならず『卑怯者』は負^(注5)ふ方がより良かつた責任を回避した疚しさを描いた作品であり、『小僧の神様』は誰の眼にも紛^(注5)ふ方ない金箔^(注5)つきの善行をしてしまつた男の淋しさをあつかつた作品であつて、それぞれの位置づけられる層はちがふにしても、ともに一種の自己嫌惡をあつかつた作品だといふ意味では、かならずしも対照的な作品といふのに適しない。

だが、作者めいめいの人柄を際立たせてゐる意味では、この両作品はやはり充分に対照的である。『卑怯者』の疚しさは、優柔不断な人物の疚しきであり、『小僧の神様』の淋しさは本能的に行動的な人間の淋しさだからである。」

この比較論は両作者の氣質を対照的にみたものであるが、「一種の自己嫌惡をあつかつた作品としては対照的ではない。」とは意味の捕捉し難い言葉だが、異質ではないと解すれば、これは相当無理がある。そして有島を非行動派、志賀を行動派と見る見方には根本的に誤りがある。小説作法として、自己を語る作家と客觀的に題材を求めて構成して行く作家があるのはもちろんであるが、これは作品が制作される過程や、作品純化の過程とは直接關係ないことである。志賀直哉が自己の身邊に取材して書く作家であることは行動派を意味しない。むしろ身邊に取材しながら、それを客觀化し、純化して行くことによって、作品が完成されてゆくものと思われる。有島は自己の身邊から取材して、それを純化して行くことは不得手であつたと見られる。これこそ作家として重要な資質の問題であらう。しかし、有島は非行動派であつたとは云えないのである。ただ「卑怯者」は秀作とは云えないし、大正九年に於ける唯一の作品——この年彼は前半「惜みなく愛は奪ふ」の執筆に専心し、後半は作品に打込もうとしたが意の如くならなかった。で作としては描写も構成も未熟で恐らく不満なものであつたろうと思われるので、「うしろめたさ」を現したというだけで「小僧の神様」との比較は無理である。

この頃から急角度に創作意欲が減退して行つたのは單に小説家としての創作力の涸渇のみではない。この点については後で詳述する。さて本題にかえて、フレンド精神病院における信仰の実踐としての善行、即ち精神病患者の看護は彼に何を齎したか。茲では彼は單に慈善事業としての病院の在り方を超えて、患者の悲痛な経歴や、人生に於ける精神的重圧が時に人を狂氣に導く不可解について考えさせられた。そこにまた一つの問題が加わってくる。それはこの病院の管理者ホールの娘イーデス（有島は彼女をその日記の中でリリイと呼んでいる）との出あいである。

彼は一八九七年（明三〇、一九才）以来、一九一九年（大八、四一才）まで実に綿密な日記を時には英文で記している。これが所謂『観想録』全二十一巻で、この他に晩年の日記としては『最後の日記』^(註6)として一九二一年（大一一〇四三才）から二二年にかけて記されている。これらによつて彼の生活特に信仰生活の実体を如実に知ることが出来るのであるが、精神病院に勤務中、彼は常にこの美しい少女にあこがれ勇気づけられていたことが繰返し述べられている。然しその美しき可憐さに心を躍らせながらも、時々見せる少女の心情の中に心を暗くするような一面を見るのである。即ち彼女に虚栄^(註7)の振舞いがあつたとして、それを疎ましく思つたりしている。然し直ぐ思い直してこれを讃美する心に変りはなかつた。ただ彼はそれを正しい愛の行為として自信をもつことは出来なかつた。それよりも罪過意識に苦しめられるのであつた。彼は「色欲を知り、盗むことをし、虚言を吐き、姑息に住み、陰言を避けなかつた」過去の生を罪過として、自我に目覺めた者の生の不安を直接的に実感している。恋愛をただちに罪の意識に置きかえることは、アメリカのピューリタンの精神の中に生きていて、日常生活を規範してはいたが、彼の場合はそれが極端で救い難いものであつた。それはキリスト不在の信仰であつたが故に單なる自己疎外に終つてしまつた。神との和解を前提として生じる罪意識であるならそれは正しい謙虚な信仰告白であるのだが、キリストの媒介を抜きにした、キリストによる贖罪を抜きにした自己認識は、やがて自己否定に陥るよりほかないのである。この前にも彼はフアニ^(註8)（これも彼の日記中の名で本名はフランセス・クロウエル）という女性と親しくなつたり、米国よりの帰途、歐洲各地を巡遊した折にはスイス娘ティルダ・ヘックとプラトニックな恋に陥つたが、いずれも実を結ばなかつたのは敘上のような理由によると思われる。

滯米中彼の思想傾向を表明したもう一つの事柄はトルストイ観である。彼は一九〇四年（明三七）九月七日の日記に、日本より送られてきた新聞にトルストイの反戦論の日本語訳があるのを発見して、その論旨に賛同し「余はTolstoyの文を読む毎に、真理此中にありと思はざることなし。而して自らはこれに従つて是が実行者たる事能は

ず。Reason を賛してこれを実行に附する能はざる苦痛は甚だしきかな。」といっている。トルストイについては帰国後札幌に在住中の日記にも「トルストイの『宗教と道德』を非常な興味と一点の疑惑もなしに読む。」（一九〇八・二・二八）と記しているのをみても、その傾倒ぶりがうかがわれるのであるが「Reason を賛して実行し得ざる苦痛」は常に彼の反復するところで、前記在米中の日記には日本の新渡戸夫人よりの書簡の感想として「嗚呼而して余は尚余の明らかに知れるところを実行する能はず。是れ余が棘なり、痛みなり。余は基督教徒と呼ぶるにふさはしからず。これを如何にすべきや。」と述べ、その夜は涙と祈りにて半夜を明かしたといっている。そうして予定通り九月十六日にはフレンド病院を去って再び學業に戻り、ハーヴァード大学選科に入学するのであるが、この頃彼の信仰は實質的に既に後退していたと見ることが出来る。「神に値しない自己」という考えである。近代文学者のキリスト者の多くが、後にキリスト教に疑問をもち、また実生活との矛盾を感じて離脱していった中で有島のキリスト教からの離脱は原因が自己にあって、到底キリスト者として自己を完うすることが出来ないという自覺に基くものである。恐らくこの病院での体験が逆に信仰からの離脱を決心させ、彼が罪と感じていた欲望の世界、また信仰によっては救い得ない社会悪に突き進んで行く決心をしたものと思われる。彼の文学は禁欲の精神とそれを裏返した強烈な生の肯定が出发点となっている。

彼はその後、農家にアルバイトをしたり、国会図書館で歴史や文学の書に親しんだり、特に社会主義者金子喜一の交友から社会主義に興味を持つようになり、クロボトキンに傾倒した。一九〇六年に米国生活を切りあげて歐洲に渡り、折からイタリアに絵の修業中であった弟生馬と共に各地の史跡や古美術を觀て回った。この時の見聞は後に自らのスケッチを挿入して『旅する心』（有島武郎著作集第十二輯叢文閣版大九・一一・一八）と題して出版されている。この旅行中、チューリッヒに近いシャフハウゼンのホテル・シュヴァネンの娘ティルダ・ヘックと親交を結び僅か一週間の滞在であったが、その交遊は終生続き、しばしば手紙が交換された。有島の死後ティルダは死の場所に

近く記念碑を建て、また自ら来日してその跡を訪ねている。

翌四十年（一九〇七）英国に渡りロンドン郊外に亡命中のクロポトキンに会った。前年『パンの略取』を出版して世界に問題を投げかけたこの高名のアナキストとの出会いは甚だ興味深いものがあるが、残念ながら「滯英日記」は殆んど全文が欠落しているので詳細な会見の様子は知る由もない。然し、大正五年になって雑誌社の求めに応じて七月号の『新潮』に「クロポトキンの印象」を書いていたので、その時社会主義に対する疑問を糺し、文学、特にトルストイについて話したことが知られるのである。

有島の文学への志向が滯米中に根ざしていたことは既に述べたが、直接彼に文学への出発を示唆したものは『白樺』の刊行であつた。明治四十年四月帰国した彼は、短期間軍籍に入り、生馬の親友であつた志賀直哉や武者小路実篤と知つた。また母校札幌農学校の後身である東北帝国大学農科大学に教鞭をとることになり札幌に赴任した。

『白樺』が創刊されたのは明治四十三年四月であるが、武郎は弟生馬、里見弴と共に同人に加つてゐる。作家たらしめとする決意と共に教会から脱退し、キリスト教から離反した。然し多くの作家の例と異なり信仰の実体はのちのちまで残り、作品の上にもそれが現れている。彼が教会から離れたのは余りに窮屈に教義を解釈し、それに順応出来ない自己を発見したことによるが、単なる文学趣味としての志向から文学即生活と考えるところまで行きつくと、どうしても自我を自由に伸張し、文筆活動を始めるには従来のような教会関係が足枷になつた。彼はそこで教会からの離反を決行した。その時の心境を彼は「三十四才で私は元の嬰兒になつた。而してその時私は始めて自分の眼を裏返して自分といふものを見るやうになつた。私が自分の眼で自分を見たのはこの時が始めてだ。」（『リビングストン伝』第四版の序）と云つてゐる。

彼は帰国の年に留学前から交際があつた河野信子と結婚しようと考えたが、二人は相愛の仲であつたにも拘らず、

信子に許婚の相手があったことなどより父の反対にあい、この愛は実らなかった。父とは人生觀上齟齬するところが多かったが、教師として地位が確立すると共に家の方から結婚話がもちあがり、見合いという世俗的な方法で神尾安子（陸軍少将神尾光臣の次女）と結ばれることになった。然し、この結婚は失敗であった。それは美貌ではあったが、心の幼なかつた安子に彼は何か充たされないものを感じ、それ故に夫婦生活が単に肉欲の充足に過ぎないように感じられ、心の触れあひのない生活は完全な夫婦生活ではないとして離婚を真剣に考えるようになった。然し、彼のその決断がつかず「彼女がもつと心を磨き、自分自身の意見で万事を判断できるように、彼女を訓練しなければならぬ。」（四二年二月七日付日記）^{注（9）}と思ひあきらめるのである。

このような不満足な結婚生活ではあったが、結婚の翌々年には長男誕生、その翌年には次男が生まれると半ばあきらめ、子供達のためによき家庭の父であることを考えるようになった。超えて大正三年九月には安子が発病、肺結核と診断されたので直ちに入院、北海道は寒冷地で療養に適さないもので十一月には鎌倉に転居し、翌年春平塚の杏雲堂病院に入院させた。療養生活がながびくことが予想されたので大学に辞表を出し、一家を挙げての療養生活にも拘わらず大正五年八月安子死亡。続いて十二月には父武も亡くなった。その間のことは「小さき者へ」（大七・一『中央公論』）に詳述されている。安子の死後、武郎は安子の遺稿集『松むし』を編集出版して親戚知人に贈ったが、これを見ると安子が単に愚直な女性でなかつたこと、むしろ情操豊かな女性であつたことが理解される。

注（1） 少年時代父が横浜税関長であつたので、老松町の官舎に住み、近くの横浜ドックの作業場を見馴れていたと思われる。吉

川英治にも「かんかん虫は唄ふ」（昭五）の作があり、少年期の見聞に基いて実感的に書かれている。

注（2） 鐘田研一『有島武郎』（小説・昭一六新潮社版）は初期の信仰問題を中心に描いている。

注（3） 宮野光男『有島武郎研究——フレンド精神病院に於ける看護夫生活の意義の考察——』（『梅光女学院短期大学紀要——文学

論集（1）』昭三九・六）

注(4) 本多秋五「有島武郎論」(『『白樺』派の文学』一九三頁)

注(5) 果して金箔つきの善行であらうか?むしろ偽善的臭味があり、有閑階級の「ひとりよがり」とも見られる。また志賀なら「卑怯者」の場合、果して卑怯者にならずに行動したかは疑問で、恐らくこのような自責さえ感じなかったのではないか。

注(6) 有島武郎『最後の日記』(昭三改造社刊。)

注(7) 九月八日(一九〇四)の日記に——「此夕 I'm 余にうれしき笑を与へぬ。彼女の笑ひは余の涙を誘ふ。されども彼女は厭はしき所あり。余は彼女の今にして女の vanity より救はれん事を祈る。」

注(8) 一九〇三年一月学友アーサー・クロウエルの家をアボンデルに訪れ、妹フランセスを知った。

注(9) 後年波多野秋子というインテリ女性と恋愛するが、彼が秋子のような知性的に見える女性に心牽かれたのは故なしとしない。芥川龍之介が晩年松村みね子(片山広子)に心牽かれたのも同様であらう。

「ある女」の構想

さて彼の代表作「或る女のグリンプス」であるが、この作が、結婚危機を迎えた明治四十三年の翌年に着手されたことには特別の意味があるようである。自我充足の第一着手として完全な自意識によって動く女田鶴子を登場せしめたのは、人形のように柔順な妻にあきたらぬ有島の知性への渇きであると共に、乾坤一擲、生をぎりぎりまで見極めようとする在米時代からの心のうづきの解決法でもあった。

茲でしばらくその成立過程について考えてみよう。前述のごとく「或る女のグリンプス」は明治四十三年後半に筆を起し、四十四年一月から大正二年三月までに断続的に書きつがれ『白樺』に掲載されたもので総て二十一章で中絶している。(これら書誌的なことは福田準之助編の復刻版に細しいのでここでは省略する。^{注(1)})がその後、十分機熟

するのを俟って大正八年一月より改作に着手し、三月には著作集第八輯として『或る女』（前編）が出版された。六月にはさらに後編が第九輯として出版されている。

從つて「或る女」は前後九ヶ年の歳月を要して完成したもので、しかも前作「或る女のグリンプス」執筆後改作に着手するまでに五年間のブランクがある。この間彼は「お末の死」(大正・一『白樺』)・「幻想」(大正・八『白樺』)・「宣言」(大正・七・一二『白樺』)・戯曲「サムソンとデリラ」(大正・九『白樺』)・「大洪水の前」(大正・一『白樺』)・「首途」(大正・三『白樺』)・「迷路」の一部)・「フランセスの顔」(大正・三『新家庭』)・「潮霧」(大正・七『時事新報』)・戯曲「死とその前後」(大正・五『新公論』)・「平凡人の手紙」(大正・七『新潮』)・「カインの末裔」(大正・七『新小説』)・「クララの出家」(大正・九『太陽』)・「実験室」(大正・九『中央公論』)・「凱旋」(大正・一〇『文章世界』)・「奇蹟の詛ひ」(大正・一〇『東京時論』)・「迷路」(大正・一〇中央公論社刊)・「曉闇」(大正・一『新小説』)・「動かぬ時計」(大正・一『中央公論』)・「死を畏れぬ男」(大正・三『新小説』)・「石にひしがれた雑草」(大正・四『太陽』)などの作品を書き、ホイットマンに関する文章や評論、感想の筆を執り、大正六年六月号の『新潮』には「惜みなく愛は奪ふ」の第一稿を登載している。この作品群と「惜みなく愛は奪ふ」の評論は「或る女」に多くの基礎的な栄養を与えていると見るべきであろう。「グリンプス」と「或る女」の差は、この六年間に成熟し蓄積せられた有島思想の発展の跡を示しているものである。「惜みなく愛は奪ふ」は厨川白村の「近代の戀愛觀」(大正・一・一〇改造社刊)、倉田百三の「愛と認識との出発」(大正・一〇・三岩波書店刊)と共に大正時代の三大戀愛の書といわれるもので、有島獨特の戀愛觀が示されていて、これを心の中で暖ため、熟せしめて行く過程に、並行的に「或る女」の構想が成熟して行ったものと思われる。然し「惜みなく愛は奪ふ」も第一稿ができてから、さらに構想を練って結局最終的に執筆に着手し、完成したのは「或る女」の完成した翌年大正九年の前半であった。故に作品としての「或る女」とそれを

明44.1 大2.3 大8.1 大8.5
 A ●————●————●————●→
 「グリンプス」<この間主要な作品群>「或る女」完成

B ●————●————●————●→
 「惜みなく」初稿 「惜みなく」完成

C ●————●————●————●→
 「宣言一つ」農場解放

裏づける評論「惜みなく愛は奪ふ」は表裏一体をなしていることが理解されるのである。

この図に示された作品成立の年次は頗る示唆に富んだものといえることができる。

即ち彼は「グリンプス」によって作家として本腰を入れた本格的な作品に取り組み、滞米当時より次第に形をとり始めた自己充足の望みを果たしたのである。その後「宣言」・「死とその前後」・「カインの末裔」・「クララの出家」・「迷路」・「石にひしがれた雑草」などで自己のいろいろな可能性を試み、青年期におけるストイックな宗教的生活をも含めて、生の肯定、生の充足の問題をさまざまな角度から描き出した。そうした文筆活動の中で「グリンプス」がまた描き足りない未熟なものであることに気づき本格的に再びこれと取り組むことになるのである。この心構えは主人公の名まで田鶴子から葉子に変わり、まったく構想を新たにしてい、筆致も熟練した描写、殊に心理描写に意を注いで描き竭したと云うことが出来る。

この一作に彼は精根を傾けたが、その前から次第に社会の推移に関心が深まり、大正中期以後の社会主義運動の昂まりを凝視して、社会主義社会の実現を予見し、自らは北海道狩太の有島農場の不在地主であり、有産階級として、やがて没落の運命にあるものとして、深く没落の運命に身を委ねる決意をもっていた。その所有する農地を小作人に無償で譲与したのもその現れの一つであった。この社会的関心は彼の創作意欲を急速に減退せしめ、その後見るべき作のないままに自決の時を迎えることになるのである。尤も晩年の作として『星座』（大一一・五著作集第十四輯

として叢文閣より出版）があるが、これは別に問題をもつ作品で後述する。

注（１） 福田準之助編復刻『ある女のグリンプス』昭四五・三山梨英和短大国文学研究室刊。

注（２） 大正中期にこのような恋愛観が出たことは一つの時代性を現しているといえることができる。大正自由主義の一翼をなすものである。

「ある女のグリンプス」の成立

完成作である「或る女」を語る前にその前編に当る「或る女のグリンプス」を調べてみる必要がある。この作が可成りモデルに準拠した書き方で「或る女」のように全体の構成に作者の思想なり、描かんとするテーマなりが均衡を以て案配されているのではなく、事実に即し、事実によりかかって描いている点が指摘される。即ち有島自身も多少の知人関係にある佐々城信子と国木田独歩との恋愛、結婚、離婚の経緯、離婚後の信子の一見無軌道とも見られる放胆な行動、それは女性の社会的地位の確立していない当時であって世人の注目を牽くに十分であった。両親の反対を抑し切って独歩と結婚した信子は二週間くらいでこの結婚に幻滅を感じ、数ヶ月後には離婚している。^{注（１）}その後三十四年には有島の農学校時代の同窓森広と婚約し、先に渡米した森の後を追って渡米することになった。ところがその乗船鎌倉丸の事務長武井勘三郎と親しくなり、シャトルに到着したが、上陸せず同船で帰国、武井と同棲生活をおくって新聞の社会面を賑わした。この事件を骨子としていたので作中人物も

早月田鶴子（佐々城信子） 木田孤節（独歩） 木村貞一（森広） 倉地三吉（武井勘三郎） 内田（内村鑑三）
十五川女史（矢島楯子、芦花の叔母） 田川法学博士、同夫人（鳩山和夫、同夫人） 有島自身も古藤義一として
木村の友人の資格で登場する。

従つて事件そのものは大体事実を跡づけているが、所謂モデル小説、実話小説でないこと勿論で、この著名なスキヤンダルを踏んまえて、そこに作者のかねて描き出さんとした自我に目醒めた女を創造したところにこの作品の眞価があるので、自然主義作品のように作者の見聞を平板に斧鉞を加えずに直叙するのではなく、自己のイメージする人間像——理想像を描き出すために実在する事件を借用したと見るべきである。尤も無感動にこれをただ借用したと考えるのは誤りで、友人森広の身辺に起つた事柄として身近かに感じ、とくに婚約中の森と信子に会い、森の渡米を送つた横浜埠頭に再び信子を送つた後だけに運命の変転に驚くと共に、客観的には、信子が世俗的絆きずなに縛られず、自分の意志と判断力で行動し、世の指弾を物ともしないシンの強さに陰ながら拍手を送る気持が動いていたのではないかと思われる。これは有島の渡米前のことであるが、渡米後はシカゴで森に会い旧交を暖めると共に、信子に裏切られた森の心境を聞き同情を示したことは観想録にも記されているところである。この友人の身辺に起つた不幸は當時は単に同情に価する事件に過ぎなかつたものが、有島自身の信仰離反や社会思想への興味、自我充足への意欲、殊に結婚生活の体験からくる不満などによつて次第に信子という一女性が大きくクローズ・アップして、彼の精神の代弁者として立ち現れるようになったものである。つまり信子に対する評価の変化は即ち武郎自身の思想的変化、変貌を意味しているのである。彼は日常生活においては最も健全な常識人で、現実の社会慣習や秩序、伝統に従つて生きる紳士であつたが、その内部には既成道徳に対する不満、旧秩序や慣習を輕蔑し、本来自由であるべき人間性の尊嚴を主張してやまなかつた。又それを果すためには教会主義のキリスト教が桎梏となるので、思い切つてその束縛から脱したが、キリスト者としての物の考え方は殊にその倫理觀に於ては後々までも変らなかつた。

彼が「或る女のグリンプス」に一女性の典型を求めた背景はこの滯米時代からの自己革命のほかに、「時の流れ」が大いに作用していると見るべきである。明治三十九年に坪内逍遙によつて始められた新劇運動——「文芸協会」の

演劇研究所は新歸朝の島村抱月によってイプセンの講義が行なわれ、牛込肴町に新設された研究劇場では抱月訳イプセンの「人形の家」第一、第三幕が上演されて好評を得ている。一方二世市川左團次と小山内薫の自由劇場は旗上げ興行を明治四十二年十一月に有楽座で行なったが、その時の出し物は森鷗外訳イプセンの「ジョン・ガブリエル・ベルクマン」であった。このような新劇運動の波、とくにイプセンの流行はやがて「自我に目醒めた女」を登場させ、

このような風潮から『青踏』^(註2)の運動が生まれ、大正期自由主義の波に乗って女権拡張運動に発展するが、有島も内発的な動機のほかはこのような社会の動きに触発されたところも大きかったと思われる。日本に於て女性の目醒めは遅れて大正期にその第一期の花を咲かせるのであるが、それに先立って自覚した女性として旧物破壊、既成道徳打倒の反時代的行為を敢てする早月田鶴子の登場は時代の先驅をなす者ということができよう。

この作は連載と云っても毎月継続したものでなく、^{註3)}飛び飛びに発表されたためもあって、明治四十四年一月『白樺』に連載し始めた頃から大正二年三月号で完成した後あまり批評の対象にならなかった。これは技法の未熟なところもあって作者の意図するようなものとならず、一般には自然主義小説の垂流とも見られ『白樺』内部でもその評価に迷ってか発言する者はなかった。

昭和二年、折から発刊中の改造社版「現代日本文学全集」の一冊として『有島武郎集』が刊行された時、正宗白鳥は「或る女」評を書いたが、これは「グリンプス」をも併せ読んだもので頗る示唆に富む作品評である。彼は田山花袋の批評にも言及してこう述べている。

○この作者は世間から同じ種類の作家として見られてゐる他の作家とは、根柢から違ふやうに思はれた。私はこの長篇小説を感興に惹かれて読んでゐるのではない。くどいのに退屈することもある。しかしその豊富な芸術的天分、弛みのない鍛錬された文章、外面的にも内面的にも人間を見る目の微細に的確なところ、日本の作家には類例がないと思ふ。私は読みながら、及び難しとの感じにいく度打たれたが知れない。

○この小説がどういふ風に世に迎へられたのか、私は聞いたことがない。国木田独歩が失戀したといふので有名な例の婦人をモデルにした小説だといふことだけは、聞いたことがあつたが、それ以外では、田山花袋氏が「ある女」の作者は女をよく見てゐないと、何かの雑誌で批評してゐたのを、私は薄々記憶してゐるだけである（覚えちがひかも知れないが）。女をよく知つてゐる筈の花袋氏がさう断じたのに対して、女をよく知らない私が異議を挟むのは後目たい思ひがされるが、今「或る女」を手にしてゐる私の偽らない感想を躊躇するところなく吐露するならば、「或る女」の作者ほど女をよく知つてゐる作者は、明治以来他になかつたのではあるまいか。

○紅葉は云ふまでもなく、漱石だつて、「或る女」の作者に比べると人間の觀察がよほど甘いのである。葉子が純真な木村などを醜弄することの巧さは、「金色夜叉」中での絶唱たる満枝が貰一を醜弄する巧さの月並くさいのと比すべくもない複雑な心理が、一句一行にも生動してゐる。女を知らない作家のなし得ることであらうか。^{注(4)}

以上は白鳥の文章の要所をアト・ランダムに書き抜いたものであるが、白鳥は女がよく描けているのみでなく、この作が従来の明治小説と明らかに異なるものを持っている点、云わば近代小説として最も重要な近代性を具備している点を衡している。故にこの評言はこの作の眞価を正しく評価したものと云うことができる。ただこの評言は「グリーンプス」中心の評ではなく「或る女」後編をも含めての評言である。

「或る女のグリーンプス」着想の動機については安川定男もその『有島武郎論』^{注(5)}で触れているが、彼によると有島はイプセンの「ヘダ・ガブラー」の影響を受けたものと見てゐる。

「彼（有島）はヘダという女性を、外部の圧迫を畏れることなく、本然の要求の命するままにこの矛盾を生き、結果としては破滅を招いたが、あくまで人間全体の活動を貫いた個性発展の犠牲者と見たのである。」
と云いさらに語を継いで

「ホキットマン的な自由人を理想としながら、現実には内と外からの抑圧のために容易にそうなり得ずに苦しんでいた有島に、ヘダの悲劇がどう映つたかにあるのであつて、彼は個性の要求に殉じたと見たヘダの勇氣とその演じた悲劇とから、驚異と讃仰と同情

とか複雑に入りまじった非常に強い感銘を受けないわけにはいかなかったのである。」と述べている。

イブセンにおける近代的自我の追求は、然し、個人の自覚や個性の発見に止らず、その社会性に於て特徴を發揮している。「人形の家」でも「海の夫人」でも単なる個性の発見ではない。有島はその根底には既に文学における社会性を考えるに十分な基礎をもっていたが、まだそれを作品として形象化するに至っていない。彼にとってはその社会主義思想よりも当面する問題は、明治末の日本社会に根強く残っていた半封建的な社会慣習や、ブルジョア的習俗に対する戦い——そこには佐々城信子の再評価が生まれ、それが早月田鶴子となつて、作品に形象化されたものと思われる。有島にとつて最も重要なことは、個人の絶体的自由の精神をいかに生かすかであつた。それが、一人の女性の姿を借りて描かれたのは恰好のモデルがあつたばかりでなく、女性が女性であるが故に二重の重圧に苦しんでいたからで、自らの手でその重圧を払いのけようとして傷つき倒れた田鶴子こそ有島の分身であつたということが出来る。「グリーンプス」は完成された「或る女」に比して多くの難点のある作とされている。その原因はなまじモデルがあるためにそのモデルに左右されて、自由にイメージを働かせて作者の意図する人間像形成に到らなかつたためであるとされている。またその筆がまだ未熟である点も指摘されている。いちいち尤もである。然し、それにも拘らずこの作が有島にとつて作家としての存立に関する重要作であることは、単に主要作であるばかりでなく、彼が作家たらんと志した原拠がここにあるからである。即ち、彼は在米當時から人間性の追求において信仰を棄てても自我の追求に真剣であつたので、棄教と作家活動とは一体をなすものであり、この生活上の飛躍の目的は自我に目覚めた理想像を描くことであつた。従つて先ずこの作で鬱積したものを一気に吐き出したのである。この作が、自然主義的な暴露文学に終らなかつた原因も茲にある。

注(一) 国木田独歩全集第十卷の年譜による独歩、信子の動静は次の通りである。

明二八・一〇・三一 信子独歩の許に來り投す。

一一・八 徳富蘇峰の斡旋にて、信子の両親、結婚を認識した書を出す。

一一・一一 独歩宅にて結婚式。

明二九・四・一二 信子失踪。

四・一八 浦島病院にて信子に面会。

四・二三 信子に会い離婚の意志を確かむ。

四・二四 蘇峰に離婚承諾書を渡す。

明三〇・一・一一 植村正久、信子復婦について山路愛山と相談を約す。

注(2) 『青路』は明治四十四年九月から大正五年二月までに通巻五十二冊、月刊にて刊行。始めは婦人文芸雑誌として出発した

が、後次第に社会問題全般に涉り婦人解放運動の旗手として活躍した。中心になつて編集したのは平塚雷鳥である。

注(3) 『白樺』登載の順序は――

明四四・一一・二―三―四―六―七―九―一〇―一一

明四五・一一・四―五―七―九 (大正)

大ニ・一一・二―三 総べて廿一章終了

注(4) 正宗白鳥「有島武郎の『或る女』」(読売新聞昭和二年七月二十五日掲載。)

注(5) 安川定男『有島武郎論』一五〇頁。

『ある女』の完成

さて「或る女のグリンプス」によつて、第一の関門――作家としての関門を潜つた有島は、同じような立場からさ
まざまな人間性探求を試るのである。「宣言」・「死とその前後」・「カインの末裔」・「クララの出家」・「迷路」

「石にひしがれた雑草」などによって思うさま生の肯定、生の充足の姿をいろいろな角度から描き竭したのである。然し、この間、彼の脳裏にはいつも早月田鶴子の幻影があった。未完のままになつてゐるこの長編の主人公が、作家としての筆の熟してくるに従つて、より完全なイメージとなつて浮び上がつて来るのである。それに作家として筆が熟してきたばかりではない、思想的にも、醒めたる女のイメージがはつきりとした人間像として形をとり始めたのである。丁度その頃、松井須磨子の跡追ひ心中事件があり、^{注1)}これも有島に新しい刺激を与えたと思われる。彼は「雜信一束」の第三信の中で前年芸術座が彼の「死とその前後」を上演した時の舞台稽古を想起して、芸熱心で演技しながら涙を流すような強い性格の須磨子が結局死をえらぶよりほかなかつた点に触れて、次のように述べている。〔全集第七卷九頁一九一九・一月十五日〕

「A」 兄

然し僕は須磨子を憫然な女だとは云ひ得ない。僕自身は破産に導く性格でもいい、きつぱりした性格を持つてゐるだらうか。多くの人は持つてゐるだらうか。性格を持たないものが性格を持つたものを批判するのは、眼の無い人が眼のある人を批判するやうなものだ。眼の無い国で通用する標準は眼のある国では通用しないかも知れないのだ。その批判は畢竟無駄だ。

無性格者の群が造り出した倫理標準、道德批判——それは当然無性格者の群に向つてのみ適応さるべきものだ。

A 兄

僕は知れ切つた事を注意しておきたい。性格とは主義を指すのではない、主張をいふのでもない。固より循習^{じゆんしゆ}によつて築き上げられた日用的な習慣的な仮皮的な屬性でもない。それでは何んだ。僕自身よく定義する事を知らない。然し僕にはそれが何であるかを感ずる事が出来る。それを云ふのだ。」

と云い「運命と個性とのつかみ合いがぼくには感ぜられる。」とも云つてゐる。この有島の松井須磨子観はそのまま「或る女」につながるものを持つてゐるように思われるのである。

次に女性心理の究明についで Herverock Ellis の “Studies in Psychology of Sex.” に多くの示唆を受けたこと

は、大正五年三月二十八日付の「観想録」に

「非常に多くの知識と暗示を与えてくれた。性的生活に就いての女性心理、ヒステリーと性的本能との関係等の諸事実を知った。後者〔前掲書のこと―筆者〕をうまく取扱へば珍らしい文学作品になるであらう。余は『或る女のグリンプス』の改作に有用な諸点を獲た。」

と述べているのもわかる。このように折にふれて心に去来するものは「或る女」であつた。機は熟して大正八年新春より改作の稿を起し、二月二十五日には前編を書き上げている。今回は想を新たにして登場人物も氏名を変えて早月田鶴子は葉子、木田孤筈は木部に改められた。後編は鎌倉京都で書き継がれ、前編は三月著作集第八輯として、後編は六月第九輯としてそれぞれ叢文閣から出版された。

「ある女」について最初に最も高い評価を与えたのは既述の通り正宗白鳥であるが、これは実に昭和二年のことだ、大正八年出版当時よりこの頃まで殆んど纏つた批評が現れなかつたのは、従来の自然派の作とも異るし、『白樺』や『新思潮』の新人達とも異り、独特のスタイル、独特の作風にとまどつたからである。彼のこの作に懸ける抱負は大きく、自ら認めた広告文にも――

「畏れる事なく醜にも邪にもぶつかつてみよう。その底には何があるのか、若しその底に何もなかつたら人生の可能は否定されなければならぬ。私は無力ながら敢へてこの冒険を企てた。」

と述べている。

茲で登場する早月葉子は如何なる女性であるかと云うと、丁度「浮雲」に於て二葉亭が近代的知識人の典型を示したように、さらにその後曲折を経て漱石が「それから」の代助に明治四十年代の知性を描き出したように、葉子はまづ近代的な知性の上に立つ女性として現れている。今までに例のない新しい女性である。ところで前編での葉子は旧物破壊、旧道德否定、個人の自由を主張し、しかも一面虚栄心の強い驕慢な女として登場する。彼女は木部孤筈との

自由恋愛、自由結婚に破れ、孤節と別れて定子を生み落すが、これを孤節に秘して里子に出し、木村と婚約して米國に出発するところが発端となっている。父母の死後、形式主義的道德の仮面の下で、醜い財産争いに浮身をやつす親類に愛憎をつかし、親族会議を向うに回して堂々と対決する葉子に読者は拍手を送りたい氣持になる。それは世俗的な道德の仮面に隠れたエゴを、その俗物的な醜惡さを見事に突いているからである。五十川女史を始めとする人物の配置も見事で、茲ではモデルに引回されることもなく、それぞれに配置の妙を得て生きて躍動している。然し中心になる葉子が、反時代的な行動に出ることは解るが、そのような行動をとらざるを得ない思想の深層までは描かれていない。つまり外面的なそれより、内的必然性、内心の苦悩が、もっと掘り下げられるべきであつたと思われる。この前編がやや通俗小説めいた感じを受けるのはそのためであると思われる。葉子は聽て船で米國に渡るが、この船中の生活はよく描かれている。作者の體驗を生かして長い船旅のつれづれ、船上の特異な日常生活、サロンや食堂での社交場らしい雰囲気、そこにも現れる形式主義、そういうものがよく整えられて生き生きと描かれている。ただ船員の生活を所謂マドロス氣質というような理解で進めているのは、興味本位にはよいが、事實の眞を穿つものではない。事務長倉地はそういう人物の一人として描かれている点に、つまり異質の人間として取り上げている点に對象としての物足らなさがある。つまり葉子が粗暴ではあるが、彼の男らしさに惹かれる過程に飛躍があり、やはり描き足りないものを感じる。前編は倉地の擒になつた葉子がシャトルに船が着いても上陸せず、病氣と称して引返してしまふ處で終っている。

後編は既に倉地の女になつた葉子のひたむきな、外見は無軌道な生活が展開するところで、倉地は妻子を棄てても葉子を得ようとし、新聞にはスキャンダルとして書きたてられ、職を失つた倉地は生活のためにスパイにまで成り下がる。二人の愛情はお互いに傷つけ合わなければ納まらないような烈しいもので、葉子は妹と倉地の間を疑つて嫉妬したり、ついには倉地に激しい敵意を抱くようにさへなる。そして腫瘍の手術に失敗して死の苦しみの中で、木部と

の間にできた定子のことが気にかかり、古藤に依頼して、内田にその後事を託して死んで行く。この幕切れは暗示的な場面で内田のことを思い出しては「あの偏頗で頑固で意地張りな内田の心の奥に小さく潜んでゐる澄み透つた魂が始めて見えるやうな気持がした。」と葉子の心境を述べ、駆けつけた古藤に内田への伝言を伝えた後も、自分が息を引き取る前に内田が来てくれるように祈る。然し内田はなかなか現れなかった。葉子は苦痛に耐えかねて痛い痛いと叫び続けるところで終っている。

有島は一作を書き終る毎に感想を述べる癖があるが、「『ある女』の書後」という文章の末尾で次のように述べている。（大八・五・一一）

「最後に付加えて云つておきたいのは、この小説にはモデルがあつて、それは或る文学者とその先妻にあたる人とが用ゐられてゐると云ふ或る一部の人達の評判です。それはさうに違ひありません。然しそれは事件の極く輪郭だけからヒントを得たので、性格などは全然私が創作したものです。殊に後半の女主人公や事務長の関係は全然無根だと云つていいのです。だからこの作物は全く私の実感の延長だとして読んでいただきます。モデルに累を及ぼしたくないから一言します。」

つまりモデルはどこまでも発端のためのヒントに過ぎないので作者はそのモデルを借りて自由に自己のイメージする人間像を築きあげたと云うのである。彼が自然主義作家のような「事実そのまま」の描写でなく、現実のある部分は捨象して、それに自己の理想像を肉付けしたことは、近代小説として一步前進したと云うべきである。これに就いて奥野健男は河出書房版『現代日本文学全集』の有島武郎集の解説でこの点に触れて次のように述べている。

「自然主義のもつていた既成秩序に対する反逆、破壊の精神を受けつぎ、また人間の本質をありのまま描こうという科学的な方法を実践した点で、自然主義の発展であり、一方現実には押し流されず、積極的に自己の理想や観念を想像世界としての小説の中に提出し、形象化し、実験している点では理想主義文学の延長といえる。」

由来「ある女」の葉子には相反する二つの見方があって、本多秋五は前篇では殊に葉子が驕慢な、得手勝手な、虚栄心の強い女性として描かれている点を強調しているが、これは筆者が前に通俗小説のような極彩色に描かれてい

ると述べた事と一致する。そして前篇の基礎構造が脆弱なのは「その当時の作者のロマンティズムを、あるひは過小評價」しているためかとも云っている。そして大正七年に書かれた「石にひしがれた雑草」のモチーフは「ある女」のヴァリエーションと見ることが出来るという見方が出てくるのである。即ち「石にひしがれた雑草」では主人公が眠っている不貞な妻の顔を眺めながら、この女に本来罪はないのだ、という気になる。「肉念の勝つた女の体質」は男をみ、世間をみるとき、我知らずその豊かな肉体を利用して身構えてしまう。彼女はそれ以外に身構えの仕様を知らないのだ。それは彼女にとって不可避な自己防衛の方法なのだと考えるのだと云う。そして「ある女」後篇が「石にひしがれた雑草」の翌年に書かれた点に言及して「恐らく作者は『ある女』後篇の執筆に当っては、後篇だけでなく、この小説全体を「石にひしがれた雑草」に見出したあのアイデアで、より確実に統一的に把握し直していたと思う」と云っている。もちろんM子と葉子は総て同型の人物ではない。が「早月葉子は（M子も含めて）カイン族の末裔の一人に外ならない。」とする本多の見解は誤まっているとは云えない。ただそれ故に葉子が類型的性格とは云えないので、やはり新時代の女性として知性のひらめきがあり、しかもその知性を以てしても女性の本能、肉欲に酔いしれる愚かしい性の奴隷であることをどうすること出来ない。その矛盾を矛盾として描き竭してみようというところに有島の意図と決意があるように思われる。愛が利他的なものか利己的なものと云う「惜みなく愛は奪ふ」の発想も要するに同じ根源から発していると思わなければならない。

後篇は前篇が少々説明的で肝心なところが省略されていると宮本百合子も指摘しているのに反して、描写は微に入り細を穿ってはいるが、殆ど倉地と葉子の愛欲生活が中心で、その火のようなただれた愛欲に集中している。それはエリスの女性と性に関する研究に基いて、性の昂揚としてのヒステリー症状とか、知性を超越した愚かしさとして描き出され、それに身も心も焼きつくす女の性の烈しさを現わそうと試みたものである。

然し、この間この小説が始めから意図した「近代性に目醒めた女性」は姿をひそめて、ただ大胆に自己の欲望の充

足をはかることのみが強調されている。作品としてそれが最終的に破滅に導くために必要であつたと云うほか、稍々不自然な感がないでもない。それからこれも既に述べた点だが倉地を通俗的なマドロスと云うカテゴリーで見ることによって、本来的な男女の愛欲の問題がズレてきているように思われる。倉地は失職して金に窮し遂には港の地図を外国に売り渡すスパイにまでなり下るが、その必然性は薄くやはり不自然な感じを受けるのである。二人が総てを投げうって愛に殉ずる構想としては可成りお粗末で、次にくるカタストロフをあまりにも性急に準備しすぎていると云わねばならない。勿論葉子が倉地に求めるものは知性ではない。野性的男性である。常識的な生活圏からハミ出しているからこそ魅力があるのである。然し、それ故に悪人型にはめ込む必要はないし、彼女がただ肉欲の対象としてのみ倉地を視ていないとするならば、そして事実視ていないのだから、なおさら倉地の取り扱い是不自然になつてくる。これはやはり前にのべた通りマドロスと云う型にはめて倉地を取り扱つたための誤算であると思われる。とすると非常によく描き竭された後篇にも描き足りないウィーク・ポイントがある訳である。

本題に戻らう。有島は大正六年六月に「惜しみなく愛は奪ふ」初稿を書き上げた後、一方で「カインの末裔」「クララの出家」「石にひしがれた雑草」を書きつつ、さらに一つの飛躍を試みたのが「ある女」であるから、初稿「惜みなく愛は奪ふ」の簡潔なモチーフが「或る女」に委曲を竭して具体化されるべきであつた。それについて野島秀勝は『有島武郎論』で次のような見解を述べている。彼によると有島は「惜みなく愛は奪ふ」で人生の可能を力説したが、現実には「ある女」ではそれを裏付けることは出来なかつたと見ている。

「あの葉子の八生命そのもののように大事に考えぬいていたこと√が実は八果敢ない√八悪夢√でしかなかったという虚無観である、この彼女が辿りついた虚無観は完全に表現し尽された小説的アクチュアリティとしてぼくらの心を打つ、だが作者自身にとってそれは心を打つなどというのんきな段階ではなかつたらう。自らの創造運動の必然

に導かれなが、そこにこそ眞の「生命」があり「人生の可能」があると信じて行きついたところに、それを全的に否定する虚無を見出すという「或る女」制作のアイロニーは確かに人生そのものの耐え難いアイロニーとして作者を圧倒したに違いない。」とのべている。

つまり作者の当初の意図したものは別個に葉子は勝手に動き出して作者の思わくと関係なく行動して、「生命そのもの」と思つてわが身も心も火と燃し続けてきた結果は「本能的な生活」の虚妄にぶつかったのである。そして「今度こそは考え直して生きてみよう。もう自分も二十六だ、今までのような態度で暮してはいられない。倉地にもすまなかつた。」と反省し、木村との不離不即の関係も清算して、倉地とほんとうの生活を築いていこうと決心する。しかし時既に遅く、彼女は病に倒れるのであるが、茲に示された葉子の心情は、有島の云う生命の可能性を示すものではなく、むしろ敗北であり、不一致の極である。彼が「惜みなく愛は奪ふ」で考察した人生の可能は茲では否定されている。このような結末は彼が意図したカタストロフとは可成り異つたものであつたと思われる。

男女が愛によって結ばれることが、生命燃焼の極致であるとする「惜みなく愛は奪ふ」の理論は作品の世界で現実を描き得ないもので、葉子の敗北が単に外形的なものでなく、彼の永年かかつて構築してきた愛の哲学の破綻に結びつくことに思い到つた時、有島の内部には眼にみえぬ崩潰が始つていたと思われる。

彼の人間観はある点でかなり偏向をもっている。その青年期の精神発達段階でも既に特異な現れ方をしている。そしてそれがやがて信仰に発展するが、この場合、全的な自己の投入が却つて信仰をぬき差しならないものにしてしまい、遂にそこから脱出せざるを得なくさせた。がこれらの全期間を通じて一貫していることは彼の生に対する信念である。「生命の可能」はそこから生まれる。彼には高村光太郎の「手」というブロンズをみて作つた詩があるが――

孤独な淋しい神秘……

手……一つの手……

見つめてみると、肉体から、靈魂から、

不思議にも遊離しはじめる手、

存在の莊嚴と虚妄——神か——無か。

お見つけてゐると、

凡てのものが手を残して消えうせた。

無辺際的空間に、

ただ一つ残りたる手。

左の手を見つめろ。

今、お前自身の手を、これを読む時の光の下に、

じつと見つめろ。

五つの指の淋しい群像、

何を彼等は考え

彼等は何をするのだ。

指さすべき何が……握りしむべき何が……

……

手は沈黙にまでもがいてゐる。

「手は沈黙にまでもがいてゐる」と云うのが彼の生命信仰である。そして「或る女」完成までには「雜草」のほかいろいろなその可能性を試みている。「カインの末裔」もその一つである。無知で粗暴な野人が生きるためには慣習と伝統の前に卑屈にうずくまっている人々のなかで、ただ独り、それらの習俗を無視して自分の力で生き抜こうとする。そして敗北する姿を冷酷につきはなして描いたもので、この主人公広岡仁右衛門という小作人に対する作者の深い共感がまざまざと感ぜられるのである。この「カインの末裔」に於る生命信仰が、やがて「或る女」に複雑な人間像として登場してくるのである。始めに図示した通り、「グリーンプス」と「或る女」の間に書かれた作品が、すべて「或る女」に結集され集大成されているからである。

注(1) 坪内逍遙は文芸協会演劇研究部を大正二年に解散したが、島村抱月は研究生を率いて芸術座を結成。松井須磨子を中心として大正二年九月有楽座で旗竿げ興行を行なった。メーテルリンク、ワイルド、イプセン、チェホフなどの翻譯劇を主として上演し好評であったが、経営上の配慮からメロドラマ風の演出に移り、抱月訳トルストイの「復活」を大正三年三月帝劇にて初演、頗る好評で日本全国を巡業し、劇中にて歌われる「カチューシャの唄」(相馬御風作詞中山晋平作曲)は全国津々浦々に歌われた。然しこの間、沢田正二郎等の俳優は松井須磨子の処遇に不満をもち脱退した。大正七年には松竹合名会社と提携して、経営をまかせ演劇に専心することになったが、その年十一月抱月は不幸流産に罹つて急逝した。残された須磨子は翌年正月楽屋にて縊死して抱月の後を追った。

注(2) 宮本百合子「『或る女』についてのノート」によると百合子は自己の体験からこの前半の簡潔さに不満を持つと述べている。体験とは「伸子」に描かれている荒木茂とのニューヨークでの結婚より離婚に至る経緯をさす。

注(3) 昭和四十年三月号『文学界』所収。

「惜みなく愛は奪ふ」の成立

茲で「或る女」の背景となる思想の端的な現れとして「惜みなく愛は奪ふ」の成立を考えてみたい。

この初稿は大正六年（一九一七）五月十五日に執筆され六月号の『新潮』に発表された。この思想を發展させた「自我の考察」は同年十一月十日北海道帝国大学農科大学弁論部講演会で発表され、同様趣旨の文章を「自己主義の考察」と題して『北海タイムス』に載せている。これら一連の論文によって既に有島の実想は十分にうかがうことが出来るが、大正八年に「或る女」を完結した後、この問題を再検討して結論を与えようとして、大正九年三月頃より執筆にかかり、完結するまでに東洋大学で「惜みなく愛は奪ふ」の題で講演し（四月二十四日）、六月には著作集第十一輯として「惜みなく愛は奪ふ」のほか「惜みなく愛は奪ふ——餘録——四つの事」その他の論文を一括して『惜みなく愛は奪ふ』と題して出版された。

「或る女」が「グリンプス」との間に十年の歳月が必要であつたように、「惜みなく愛は奪ふ」も大正六年の初稿から完成までに三年の歳月を要し、然もその間には大作「或る女」が挿まれている。これは偶然ではない。「或る女」が大正六年の「惜みなく愛は奪ふ」に導かれていることは既に触れたが、これはその持論の単なる作品化でないことも既述の通りである。それは大正六年の「惜みなく愛は奪ふ」は論理的にはその根幹の部分が構築されたのみで、十分な理論的展開はなされていない。（大正六年の文章は六頁ばかり、大正九年の単行本は二十九章九十三頁（^注）ともに全集本による）の龐大なものである。）茲で考えられることは大正六年の段階で彼が考えていた「愛」についての見解が、若し十分に「或る女」に描きつくされ、自ら満足するようなものであつたならば作家有島の立場としては大正九年の龐大な論文の必要はなかつたのではないかと云うことである。これに近い見解は西山正一が「『星座』の中核的問題」の中で「星座」を論ずる前提として「惜みなく愛は奪ふ」に言及して「或る女」では彼の本来的思想

である一元的本能的生活——愛の力による自我の拡充発展が十分になしとげられなかった、早月葉子は現実に打負かされて最後には自分は誤っていたと反省させている。これでは彼の本来的な思想は十分に表現しつくされていない。そこで現実的条件の一切を捨象して、本来の思想への統一を計ったものが大正九年の「惜みなく愛は奪ふ」である——と見るのである。またその後創作意欲を失ったこともそこに原因ありと見ている。その点に関してはまた別個の見方もあるが、とにかく『或る女』が作品としてある程度成功し、日本には珍しい近代小説として史的に高く評価され、有島自身もある程度の満足感を持ちながらも、彼の思想の完全なる作品化と云う点では全く失望したものである。一連の書簡にそれを感じることが出来るのである。

「大正八年五月廿一日付足助素一宛」

（前略）『或る女』の末尾の所再考を促すと云ふ葉書は一面僕を失望もさせ奮起もさせた。それが為出版が延期されるのは兄に對してすまない訳だが、さういふ次第なら暫く印刷を見合はしておいてくれ給へ、二十三日に帰るから、帰った上で読みなほしてみる。小説は総てどこで打切るべきだといふ点はない。人生が長いやうに連続してゐるもので、作者がいい加減の所で打切るのだ。昔ならうまい落ちになつてゐないと、まとまらないとか何とかいつたのだらうが、僕一個の考へとしては小説が真実味を持つたものであれば何処で打切つてもそれでいい筈だと思つてゐる。だからあの結尾は今までの考へからいふと物足りないかも知れない。然しそれには頓着しない、唯恐ろしいのは真実味が足りないといふ事だ。（下略）」

「大正八年六月十五日付原久米太郎宛」

（前略）漸く『或る女』の後篇が世に出たから如例一部御送呈する。どうも少し急ぎ過ぎてゐはしまいかと心配になる。もつと客観的に見た方がいいのではないかと思つてゐる。然しある女に起つた悲しい運命の流れは相当に書いた積りだ。ご厳評を煩はし度い。（下略）」

「大正八年七月五日付吹田順助宛」

『或る女』後篇について委しい御批評を有難う御座いました。毎時でも著作が現れる時一番適確な感想を發表して下さるのを感じてゐます。テーマがあれ丈けのものになつてもう私には大き過ぎるといふ憾みを感じないではゐられませんでした。さう思ふと自分の心の貧弱さに少し気がひけます。

「戦争と平和」などを泉から滾々と水が湧くやうな豊かさで心易さを以て書いたトルストイなどが心から妬まれます。（下略）

以上のような書簡によって、この作が自ら満足でないもの、またその不満の原因が何であるかを察知し得るのである。「惜みなく愛は奪ふ」は独立した論文ではあるが、以上のような事情によって成立したものであるということはこの一文を理解する上に重要なことである。

この論文の考え方の基本は、先ず彼のキリスト教思想批判からきているということである。これは大正六年の短い論文の主要なモチーフをなしているが、これは大正六年あるいはその少し前の時点で着想を得たものではなく、棄教から文学への傾斜―結婚の明治四十二年―三年に溯るべく、さらに滞米中の思想的転換期の明治三十八年頃まで溯らねばならないとも考えられる。然し常識的には大正六年の時点で考えてもよいのではあるまいか。彼はまず愛他愛己の問題の解明から始めて、キリスト教が、愛他主義を称え、自己犠牲によって人を愛し、己を空しうして愛を人に与えると説くことに反対して、愛他は本来愛己であり、人を愛するとは自己の強烈な個性にその対象を吸引摂取して、究極は愛己と一元となるものであり、与えるものでなく奪うものであるとの見解に到達したものである。この考え方の根底にはキリスト教の二元論、霊肉を対立させ、霊を優位に置くことの矛盾に自ら悩みぬいた体験によるもので、この霊肉を一致させ、一元化させることによって、人生の意義を新しい愛の理念に置きかえ得ると信じて、その理論づけに邁進したものである。つまり愛他を含む強烈な自己愛―即ち本能的生活が、愛の絶体境であり、そこに人間本来の姿をみようと云うのである。勿論これは単なる思いつきではなく、ベルグソンやニーチェ、後にはクロポトキンよりの影響、また詩人として最も傾倒していたホイットマンの影響などによる生命哲学で、一つには時代の動向が、彼に一つの途を示指したものと見られる。即ち早く「神秘的半獣主義」（明三九）を唱えた岩野泡鳴あり、彼に続く者としては「近代の恋愛観」（大一一）の厨川白村、「愛と認識の出發」（大一一〇）の倉田百三がある。その主唱するところはそれぞれ異なるとしても大正自由主義思潮の現れであり、「生の充足」という共通点

をもつていたと思われる。

有島の歩んだ途が他と異なる点は、キリスト教に触発されて起った思想であり、それを否定するところから出発していながら完くそれから脱却し切ることが出来なかった点、それ故に岩野のように実践を通して文芸即人生という思想には到達せず「本能的な生活」は一つの理想像に過ぎず、理論そのものにも矛盾がある。そしてそれは彼自身もよく自覚していたもので「惜みなく愛は奪ふ」の出版後、

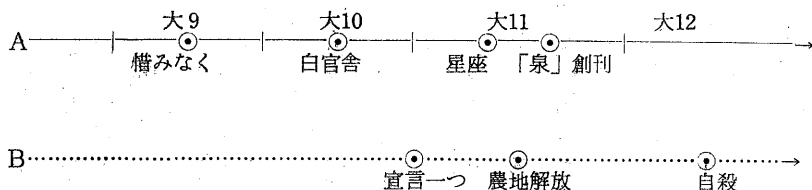
「あの論文が出版せられてから読み返して気がついたことだけでも、あれは現在の私の持つてゐる心持を積極的に現わした積りでゐたのだつたが、^{あなが}強ちさうでないのに気がついた。あれは私自身の偶像破壊の運動であつたのだ。私の価値判断の準備の変更であつたのだ。あれから出発して私の究極的な哲学は組み立てられねばならぬのだつた。」^{注(3)}

と述懐している。これで「或る女」で果さなかつたものを理論的に推進しようとした試みも自ら失敗と自覚せざるを得なくなつた訳である。これは彼自身のうち建てた思想の崩潰で、彼の内部に深く根を張っている儒教的倫理観とキリスト教的倫理観が、近代精神によつても打破することが出来なかつたことを示すものである。然しこの抜くべからざる大きなものに体あたりして、その本質にせまつた点は大きな思想的前進と見なければならぬ。有島は「惜みなく愛は奪ふ」以後思想的に低迷の状態で、創作意欲も後退して行くが、同時に時代に対する観点、社会意識の発展がみられ、時代の急激な流れの中で、積極的にこれに対応して行こうとする気構えが見られるのである。これがやがて彼の最後のなカラストロフへの途となるのであるが、それは少くともこの時点では彼には自覚されなかつた。

注(1) 『国語と国文学』昭和三十年十一月号所収。

注(2) 足助素一(明一一〇昭五)札幌農学校卒業。有島の親友で出版書肆叢文閣を経営。有島武郎の著作集や晩年の個人雑誌『泉』は総べて足助の手で出版された。

注(3) 大正九・一〇・一〇日付「旅する心」書後の一部(叢文閣版全集第四卷所収。)



「星座」と生活革命

茲で「惜みなく愛は奪ふ」以後の活動を年譜により辿ってみると長篇小説としては「星座」があるが、既に述べたようにこの作品は大正九年以後の低迷から十分に脱却していないままに書かれたもので問題のある作である。これは大正十年六月に「白官舎」と題して執筆され七月号の『新潮』に掲載され、翌十一年四月に書継いで完成したものを「星座」と改題して五月に著作集第十四輯として出版されている。しかもその間大正十一年一月には『改造』に「宣言一つ」を書いて自己の社会的立脚点を明らかにし、やがて七月には北海道狩太の有島農場の小作人に「小作人への告別」を告げて農地解放を断行している。この十年から十一年は有島にとって生活革命の時機であり、その進行中に書かれた「星座」は正に新しい生活への基礎固めとしての第一作であった。藤村が作家としての出発当時に「家」を書き、その最晩年にそれをさらに大きな時代的スケールに発展させた形で「夜明け前」を書き、ついで自伝的部分をも含めて夜明け後の「東方の門」を書こうとしたように、武郎は「星座」によって自らの青年期の人間形成の過程から出発して、その後彼が辿った人生行路を回顧し近代日本の歩みを作品によって跡づけようと思図したものである。これは彼自身の述懐によって明らかである。すなわち「『芸術と生活』書後」(大一一・七)に――

「創作らしい創作をしなくなつてから約三年を過した訳である。「星座」を書くについても、私にはまだ本當のところに自分が立つてゐないといふ感じがしてならなかつた。然し考へてばかりゐることが必ずしも常によいことではない。ぶつかつて行くことも大切だと考へた。私は今年中にはその第二巻を出したいものだと思ふ。多分第一巻位の厚さのものが、あと四冊位にはなるのかと思つてゐる。」（傍点筆者）

これで藤村が「東方の門」に意図していたものと有島の一大長編小説「星座」の構想とは殆んど同じようなものであつたことがわかる。明治から大正へ、近代日本の歩みは自らその劇中に活動した者にとつて興味ある題材である。のみならず、それは客觀的に時代を描くのではなく、近代精神の展開は明治以来の既成概念を覆えそうとしてゐるのであるから一層切実な問題として現れるのである。

恐らくこの「星座」が第一巻に於て成功していたら彼は自らを死に追いやることもなかつたのではないがと思われる。

この作は出版當時あまり問題にならず、後にも有島の作品系列からはずされてゐたものが、昭和になつて本多秋五などによつて再評価され、唐木順三までが推賞してやまぬようになつた次第は、『明治大正文学研究』第十八号「白樺派の研究」号に紅野敏郎が詳細に紹介し論じているが、にも拘らず「星座」は彼の傑作というには難点があるのである。この作が出版當時世評を呼ばなかつたのは、時代の流れに棹さしていなかつた点があげられる。明治四十一年の時点で藤村が「春」を書き「文学界」同人たちの青春群像を描いたことは意義があつたし、手法も美事であつたが、「星座」は北海道という植民地的新天地を背景として農学校に学ぶ青年達の群像を描いた点は「春」と似たような構想であるが、これは明治三十二年十月五日から十年月十五日までの生活記録で、執筆時既に二十年以上の歳月を経過し明治三十年代の青年の理想と、大正期社会主義思想が澎湃として起りつゝあつた頃の青年のそれとは相当距りがあるし、歴史的位置づけの明確でない点では時流に沿つてゐるとは言い難いが、本多らのように明治後期のあ

る青春群像を描いたものとして高い評価を与える者が出たのはそれなりの理由があるようである。

クラークの青年よ大志を抱けという遺訓はいろいろな形で農学校に学んだ青年に夢を抱かせ、時代の推移にも拘らず、青年を未来の可能性に駆りたてたのであった。有島は「星座」に於て自分をも含めて北海道という特殊な風土のなかで、もがき苦しみながら未来を掴み取ろうとする青年群像を描きかけた。そうしてそれが発展して現時点に至るまでの経過を描きかけたようである。上京して学問をしたいという野心に燃えている西山、同じく上京の望みを抱きながら胸を病んでそれも果さず、病氣と貧困の上に借金のために妹を妾奉公に出そうという父——それを理不尽と却ける力もない自分の立場に苦悩する星野、粗野で人を人とも思わぬ行動をするが、根は純粹なガンベと渾名で呼ばれている片目の渡瀬、それにおぬいという可憐な少女を配して、野心家、偽善者、空想家、いろいろの青年が登場するが、その情熱の志向するところは判然とは解らない。これらの青年達の醸し出す鬱屈気を描こうという意図は非常によく解るが、具体的な肉付けにおいて人間が描き竭されていまいと云うことが云えるのではないか。この失敗の原因は何かと云うと、自己を中心とする青年達の動きに必然性がない点である。有島は遂に自然主義作家のごとく自己を語る作家ではない。彼の成功作は「或る女」でも「カインの末裔」でもテーマがはっきり設定され、それを追って構想が立てられ、肉付けがなされるのである。見聞に基いてそれを客観的に描くことによって作を構成して行くことは彼の最も苦手とするところである。従って「星座」における青春群像は中心のない一つの鬱屈気としての纏りのない空しいものになってしまった。殊に大正十一年の時点で社会に目醒めつつある青年を明治三十二年に溯って求めたことは失敗の大きな原因といえよう。もっとも彼の精神革命が急速に進行していた当時、じっくりこの作に取り組んで行くことは不可能に近かったと考えられる。この作の執筆は前編の「白官舎」の時が一週間、書き継いで完成した時は大正十一年四月十三日であるが、前年十一月十一日の日記には――

注(一)

「『白官舎』の続きに筆をとり始める。駄目なり、生活をかへねば駄目なり。思ひ切った事が書けない。」〔傍点筆者〕

とあり、そのすぐ後十八日の項には――

「机に向かつて居るけれども中々筆が動かない。どうもクライシスが来てゐるのだ。自分の性格をもう一層深く掘つて見るべき必要に迫られて居るのだ。これが成就しなければ進境は来ないだらう。進境が来なければ制作に従事する意義は没せられる。衣食の必要ある人はこんな時でも不得已書かねばならないのだらう。それを考へると涙が出る。」〔傍点筆者〕

「生活をかへねば駄目」とか「クライシスが来てゐる。」「自分の性格をもう一層深く掘つてみるべき必要」ということは單なる技法上の問題ではない。十年以上の作家歴をもつ彼が今更そのようなことで思い悩むこともない訳で、生活革命を成し遂げるべく執筆を始めた「星座」であつたが第一歩において自らの不徹底な生活態度に蹟いたのである。しかも日記はこの十八日で中絶し翌十一年六月まで空白であるのも頗る暗示的である。恐らく幾度が筆を抛つてはまた筆を執り、その間「宣言一つ」などに勇気づけられつつ極めて短時日に完成したもので「或る女」完成時のようなひたむきな打込みはなかつたと思われる。この作が意あつて筆足らずの感を与えるのは斯かる事情も考え合せねばならない。殊に「宣言一つ」を発表した後はこれに批判を加えた広津和郎に反論として「広津氏に答ふ」を『東京朝日新聞』（一月十八・二十一日）に発表したり、三月には「芸術と革命の關係」を『時事新報』（二月二日）に発表、その後「星座」を書き上げて（四月十三日）後も北海道農場のことが常に彼の脳裏を去らなかつた。^{注（2）}農地解放は曾てレフ・トルストイが志して果さなかつたことで、そのために彼は妻や家族と離反して家出を決行し、病を得てアスターポヴォの駅に行倒れとなつて偉大な生涯を終つてゐる。（一九一〇・一一・一〇）有島の農地解放は直接にトルストイの影響によるものではないが、彼がこの著名な作家の行跡に深い関心を持ち尊敬していたことは日記によつても知ることができる。

この農場は武郎の父武が、官界より財界に転じ日本郵船、日本鉄道などの重役を勤め実業家として成功した時に北海道狩太に開拓地として入手したもので苦心經營の結果、立派な農場となり、農学校出身の武郎は本来なら此処

を根柢として新しい農業に取り組むべき理想実現の場であつた訳であるが、彼はそれより前に現代日本の農地制度の矛盾に目醒め、後に小林多喜二の「不在地主」に描かれたような北海道の特殊な小作制度の不合理に思い至り、遂にこれを解放する決意を固めた。「宣言一つ」はその前提となる思想で、第四階級（労働者）と自らの属している階級に一線を画して、亡び行く階級に属する自分の為し得ることは矛盾解消に消極的に参与すること——即ち農地解放にありと考へ、親族会議を開いて生馬その他の弟妹の賛同を得て大正十一年七月十八日に実行に移したものである。しかもこの農場解放は単に農地を小作人一人一人の所有とするのではなく一種のホルホル形式の「共生農園」で組合組織の農場であつた。その大概は当日農民達に話した告別の辞「小作人への告別」に細しい。その告別の辞の終りのところで彼は次のように述べている。――

「終りに臨んで諸君の将来が、協力一致と相互扶助との観念によつて導かれ、現代の悪制度の中にあつても、それに動かされないだけの堅固な基礎を作り、諸君の精神と生活とが、自然に周囲に働いて、周囲の状況をも変化する結果になるやうにと祈ります。」

これが資本主義社会で実現し得る彼の理想の限界であつた。武者小路実篤の「新しき村」と比較する時、この種の理想達成の不可能なことは五十歩百歩であるとしても、社会主義思想の波を潜ってきた彼の理想が、最も現実的な堅実な基盤に立っていたことは高く評価されてよいのではないか。^{注3)}とにかく日本に於て社会主義思想の初期の段階にあつた大正十一年という時点で彼のような立場にあって、これだけのことを成し得たことは驚くべき勇氣ある決断であると言わねばならない。

注(1) 『最後の日記』（昭三・一〇・八改造社版）の七頁。なおこの日記は大一〇・一一・九から一八まで中絶、大一一・六・

一五から九・一二までとなっている。

注(2)

有島は社会主義思想に傾倒しつつも自らを同伴者の地位から脱出せしめる決意をなすに至らなかつた。従つて農地解放は彼の為し得る極限であつた。作家・教授の地位を棄て、先ず労働体験を持たねばならぬとして、ひそかに工場労働者とな

つたり道路工事の人夫になったりして積極的に労働階級に近づこうとした藤森成吉と比較すると同じインテリ出身の同伴者にも非常に距りがあることが解る。

注(3) 有島武郎個人雑誌『泉』第一巻第一号(大一一・一〇月号)四八頁。

注(4) 尤もこの農地解放は戦後に共生農園のその後について調査した青山孝行のように有島の行為は特権階級の独りよがりのエゴイスティックな行為と断定する向もあるが、有島自身農場の将来を樂觀していなかったことは「農場解放願末」(『帝國大学新聞』)に明らかである。(青山孝行「有島農場開放問題の帰結」(『国語と国文学』昭三一・八月号))

死とその前後

有島武郎が大正十二年六月九日軽井沢の別荘浄月庵で婦人公論記者波多野秋子と心中したことは死体が発見された翌七月七日新聞に報道されて世人を驚かせた。彼は地方講演などを通じて「有島宗」というべき熱心なファンを全国に持っていたので、その社会に与えた衝撃は大きかったが、その後九月一日には関東大震災があつて一時出版機関も潰滅状態になりこの大きな天災のために有島問題は自然忘れられてしまった。然しその死の解明には芥川竜之介の死と共に多くの批評家がいろいろの角度から論じているが、秋子との死は一つの契機ではあつても決定的要因ではないというのが一般的な見解である。作家として彼の辿ってきた路を跡づけるならばそれは自ら明らかである。「或る女」によって試みた豊肉一元化の失敗、さらにそれをせめて理論的に解明しようという試みの失敗、さらに新しい時代を志向するために必要な諸要素を欠いていたこと(「星座」の場合)による深い敗北感が彼を死に一步近づけたものと思われる。大正十二年五月「星座」出版後の虚脱感から遂に立ち直れなかったことはその後の作品にも現

れ、「ドモヌの死」(戯曲一一・一〇)・「酒狂」(一二・一)・「文化の末路」(一二・一)・「或る施療患者」(一二・二)・「骨」(一二・四)・「瞳なき眼」(詩一二・四〇五)・「独断者の会話」(一二・六) などには死との対決の断面をうかがうことができる。彼の死については離反したはずのキリスト教との関係が大きく浮び上ってくるのである。文学——創作という手段によって彼の追求したものはすべて原点であるキリスト教に戻って来ているとも云うことが出来る。岡本道雄はこの点について「有島武郎の自殺とキリスト教」^{注(1)}に於てその原因を要約して——「それは、キリスト教を棄てた故の空虚さであり、いわば真空の中で自己の確立をなそうとした故の空虚さであり、また自己の階級的制約を知った故の空虚さであった。」

と云い、その精神的空虚さは「個」と「類」(普遍的なもの)の分離からくるものと結論している。斯くして彼は過渡期における一知識人として敗北したのであった。然し、武者小路実篤が述べた——

「人間に愛憎をつかして成功するより、人間を愛して失敗する方が、勝利者だ。失敗しても人間を益々愛することが出来れば、それは失敗ではない。」

という考えによれば、最も人間を愛して敗れた有島は人生の最大の勝利者と云うことが出来るのではあるまいか。

注(1) 神戸女学院大学論集第九卷第三号六三頁。